

## 「教職実践演習」における教職理解の深化のこころみ

奈須 恵子

### はじめに

筆者は、本学における「教職実践演習」開講の初年度(2013年度)と翌年度(2014年度)、池袋キャンパスで1クラスずつ担当した。履修者数は両年度ともに30名であった。

池袋キャンパス展開クラスの特徴は、履修学生の学部学科、取得予定免許教科が多岐にわたっているということである。本学は池袋7学部、新座3学部の10学部で構成され、2015年度現在は計30の学科・専修で計14教科の中学校・高等学校1種免許の課程認定を受けている(情報・商業・福祉は高校1種免許のみ)。このように教科数が多いことと、社会・地理歴史・公民のように複数の学部学科で取得可能な教科もあるため、教科毎あるいは学科・専修毎の「教職実践演習」クラス編成は基本的に不可能である。3年次には必修の「(各)教科教育法」があり、取得予定免許教科の同じ学生たちが集まるが、そのクラス編成を4年次秋学期必修の「教職実践演習」につなげることは残念ながらできない。

しかし、クラス編成上のそのような制約は、反面、履修学生の多様性を活かしたクラス編成と学習を可能にする利点にもなり得る。教育実習を経験した学生が、他の学生たちの実習経験も共有化しつつ、自身の経験に対する省察を深めるよりよい機会とすることにも役立つ面が大きいのではないかと考える。以下、2013年度と2014年度に筆者が行ってきた「教職実践演習」クラス運営について簡単に記しておきたい。

### 1. クラスづくりとグループづくりについて

上記のように、池袋キャンパスでは7学部24学科・専修にわたる教職課程履修学生がおり、そのうち教育実習履修年次にあたる学生たちが、30名前後ずつクラスに分けられ、8クラス展開となっている。そのため、1クラスに、国語、英語、社会、数学、理科、ドイツ語、フランス語、宗教など、様々な免許取得予定教科の学生たちが集まることになる。

何名か同じ学科で顔見知りの学生はいても、基本的に初対面のメンバーでクラスが構成される。合同クラスの授業回もあるため、個別のクラスでの授業・活動は8回ほどとなるが、その限られた個別クラスの授業回を通して、短いながらも1つのクラスとしてまとまった活動を実現できるようにする、というのが筆者の最も意を用いている点である。

途中からグループメンバーを固定した活動を行っていくが、初回の冒頭でまず教育実習時に実際に担当クラスなどで行った(これから実習に行く学生は実習で行う予定の)自己紹介の形で、全員1人1分ずつ、教壇に立った自己紹介を行う。その後、履修者名簿をもとに、できるだけ学科・専修が別になるような4～5名グループになり(このグループ決定は筆者が指示する)、各自の教育実習経験の概要を情報共有する話し合いを行う。初回のこの話し合いでは、前週の合同クラスで記入した教育実習の

「フィードバックシート」を持参することになっており、その「フィードバックシート」を活用して、教育実習での授業担当時間数や良かったこと、大変だったこと、印象に残ったことのアウトラインを、各自が出し合って、グループ内での情報共有を行う。その上で、各グループでの話し合いの概要をまとめて、クラス全員に共有化することを行う。

初回の段階では、まだ授業や生活指導、学級運営などテーマをしぼることはしない。自分自身の実習経験が、経験した本人にとってはまずは揺るぎない絶対的な経験になり、出発点になることは間違いないが、無論その自分の経験だけで、“学校教育の現場は斯く斯くしかじかである”とか“今の生徒はこういうものだ”などと敷衍化することはできない。そうした視点を履修学生が持つためにも、実習経験の各自の相違や共通性ということ意識できるようにしたい。

例えば、授業担当時間数だけでも、3週間の実習期間のうち最終週に10時間以内という学生もいれば、2日目から指導教諭の担当している授業をほぼすべて担当して40時間以上という学生もいる。中学校で生活指導面での困難さややりがいに実習中の記憶が集中している学生もいれば、高校で授業準備と実際の授業の大変さや工夫を熱く語る学生もいる。また、できるだけ学部学科や実習教科の異なる学生でグループをつくっているため、授業準備一つをとっても、理科で実習を行った学生の実験を取り入れた授業準備の苦勞に、文系の学部学科の学生が驚くなど、自分の実習経験からは想像できなかったようなことを、同じ時期に実習を行う他

の学生たちが経験したことを知ることになる。そうした経験の相違を共有化した上で、各グループで話し合っ出てきたことを、最後にクラス全体で共有化する。ちなみに、この初回のグループ活動の際には、教育実習が10月予定などの実習未経験学生も若干名いるが、同じグループやクラスの実習経験者に話を聞いて、実習に向けての直前かつ具体的な心構えができたとの感想を得ることができている。

2回目には教科指導についての振り返りとその共有化、3回目には学級運営や生活指導についての振り返りとその共有化を、グループ⇒全体という順番で行っていく。基本的には振り返りを出発点とするが、ここではまだ、自分が出来たこと、やりたかったけれども出来なかったことを、改めて意識化していく作業に重点をおく。それと同時に、後半のグループ活動に向けての課題発表(学級通信あるいは教科新聞づくりとその発表)とグループ編成を進めていく。グループ編成では、大きくは実習校種により中学校グループ、高校グループに分ける(中高一貫校で実習した場合には、どちらかを自分で選ぶ)。

実は、実際に活動するグループを4～5名で編成する過程で、初年度(2013年度)には、大グループ(中学校グループ、高校グループ)で話し合っ、自分のテーマ関心と近い学生と組んでグループ編成を行うことも考えていたのだが、学生からの発案で、機械的に4名あるいは5名で組んだ後に、グループで話し合っグループとしてのテーマを決めるやり方を採用することにした。そして、大グループとその人数が定まったところで、学科・専修が分散するよ

うに筆者が指示してグループを編成した。このやり方で2013年度は中学校で5グループ・高校で2グループ、2014年度は中学校で3グループ・高校で4グループとなった。大グループの構成は年度によって今後も変動していくものと思われる。

4～5名グループが確定した時点で、グループ内での小インタビューとクラスへの「他己紹介」を行う。まずは各自が白紙に、5分程度かけて自分が好きなこと・興味のあることをランダムに書き、それを共通項でグルーピングする作業を自分で行う。その後、各自の書いたその紙をもとに、順番に他のグループメンバーからのインタビューを進める。共通の関心事を見つけることもあるが、“これは一体どういうものなの？”“どういったところが好きなんですか？面白いんですか？”といったことを尋ね、答えるといったやりとりをして、グループメンバー相互で活発に話し合う時間となる。グループ内での小インタビューの後には、筆者が指示して、数名にはなるが小インタビューに基づくクラス全体への「他己紹介」をする。例えば、“Bグループの○△さん、グループメンバーの☆◇さんをクラス全員に向けて他己紹介してください”と指名し、1分程度の「他己紹介」をしてもらう。これは時間の関係上、各グループから1組ずつの指名しかできないが、この「他己紹介」タイムは、グループやクラスの雰囲気をつくる好機になるように思う。特に興味深かったのは、紹介された人についてクラスメンバーが知るとともに、紹介する人のほうにも目を向けることになったということである。毎回の授業の終わりにはその回の感想をコメントシートに書いて提

出してもらおうが、「他己紹介」を行った回では、紹介した人の（いわば）プレゼンテーション力に感心し、参考になったといった感想も少なからず見られ、紹介される人だけでなく、紹介した人について知ることにもつながった様子がうかがえる。

## 2. グループ活動で進めること

後半の課題づくりとその発表に向けたグループを組んだところで、グループ名をつけることと、そのグループとしてのゆるやかな共通テーマを設定することを指示する（共通テーマの設定については後述する）。そして、4～6回目は、授業の後半3分の1は各自の課題作成とその進捗状況をグループメンバーで共有化する時間とする一方、授業の約3分の2の時間を、2回目、3回目で行った教科指導や生活指導に関するテーマをより掘り下げる時間にあてた。

2回目、3回目では、自分の教育実習経験を通して、自分が出来たこと、特にやりたかったけれども出来なかったことを意識化することに焦点をあてていた。よく出てくる経験談としては“生徒にきちんと注意しなくてはいけないとわかっていながら、十分にできなかった”“クラスごとの特徴を踏まえた授業展開・工夫ができなかった”などがある。

しかし、それらを意識化して終わりではなく、やりたかったけれども出来なかった、やるべきだったけれども出来なかったことが、どのようにすれば出来るようになるのかを考え、さらには、教育実習の時点では気づくことが出来ていなかったけれども、教員になるのであればやりたいこと、やるべきことは何であるのかに気づ

くことが、この「教職実践演習」の授業では不可欠であると考えられる。

4回目から6回目の授業では、“自分の担当しているホームルームの生徒が、学校に持ってきてはいけなと決まっているスマートフォンを持ってきているのを見つけました。あなたならどうする？”といった生活指導に関わるテーマや、“現行学習指導要領で国語科だけでなく、各教科で実現すべきとされた「言語活動の充実」は、何故、どうして必要なのでしょうか？それを自分の教科の授業で、具体的に展開するプランにはどのようなものがあるのでしょうか？”といった教科指導に関わるテーマを提示して、グループで意見や具体案を出していくといった活動を取り入れる。テーマとしては、教員採用試験で論文や面接のテーマになるようなものもあるが、それを、実際の自分の経験した教育実習の振り返りもしつつ、実習校で先生たちが取り組まれていた場面やケースなども想起しながら、具体的な教育現場での実践のあり方やその共通性や多様性に気づく契機としていくところにねらいがある。さらに、自分がもはや実習生ではなく、実際にその学校に勤務する教員であったならば、その問題にどのように取り組むのかを考えていくことを促していく。

このグループディスカッションについても、他の回と同様に、各グループで出てきた意見やアイデアをクラス全体で共有化するが、その際に、実習校で見聞きした取り組みなどを、より詳しく紹介してもらうことなどにも留意している。例えば、生徒のスマートフォンの取り扱いについては、それぞれの学校で対応に苦慮し、先生たちが試行錯誤を重ねている問題だと考え

られる。現段階で取り組みに一律に決まったものは存在せず、めざす目標は共通していても、学校現場ごとに様々な方針や対応があるということを知り、現在進行形の問題や課題を、自分が学校教員であるとするならば、どのように考え、行動するのかを主体的に考えることを、このディスカッションによって促していきたいと考えている。

### 3. 課題とその発表会について

4～6回目では、毎回その後半を使って学級通信あるいは教科新聞づくりの課題に各グループで取り組み、7回目と8回目でその作成した課題の発表会を行う。

筆者の最初の課題説明では、学級通信と教科新聞を例示し、それが誰に対して、何のために作られるものなのかということを、グループで話し合いを交えつつ説明していく。

学級通信のモデルは、「教職実践演習」を担当されている高橋喜代治先生からいただいた実物で、高橋先生が公立中学校で先生をされていた頃に作成された学級通信である。筆者が高橋先生から伺った、読み手として当然まずはクラスの生徒を想定していること、さらにその先に生徒の保護者に読んでもらうものとして作っていることなども紹介し、高橋先生が中学校の担任であった時に、1学期のクラスびらきの際に配った1枚、3学期のはじめに配付した進路を考えることをテーマにした1枚を学生たちに紹介する。

教科新聞については、仲本正夫氏の『新・学力への挑戦』(かもがわ出版、2005年)に載った仲本氏自身が高校数学の教員として作成した

教科新聞（タイトルは「数学だいきらい」）を紹介する。

学級通信や教科新聞の役割、意義の考察に続けて、本授業での課題を提示する。それは、

①「未来を創る中学生／高校生に伝えたいことー教師を目指す私たちからのメッセージー」という大きなテーマのもと、自分が教育実習で出会った生徒たちを想定しつつ、自分がホームルーム担任あるいは教科の担当教員になったと仮定して、そのクラスで配付する学級通信あるいは教科新聞を作成する。中学校1年の入学式の後にホームルームのクラスびらきで配付する、高校2年の終業式のホームルームで配付する、中学校2年3学期の最初に配付するなど、配付する学年・時期・タイミングを自分で設定する。大きさはA3判1枚。メッセージを伝えるということでは、紙媒体だけでなく、自分で作った歌を歌う、といったことも想定してよい。ただし、その場合は補足資料としてA4判1枚をつけること（歌を歌うのであれば、その歌詞を生徒に配るといったことを想定）。

②作成した学級通信あるいは教科新聞を、実際に設定したクラス・タイミングで配付することを想定して、配付⇒1分半の生徒への説明を行う。これを発表会形式で全員で行う。

以上の2点である。「未来を創る中学生／高校生に伝えたいこと」というテーマについては逸見敏郎先生担当クラスの課題のアイデアからヒントを得たものであるが、教職につくことが決まった、あるいは教職につこうとしている履修学生については、必ずしも自分が教育実習で出会った生徒たちに限定することはないということもアナウンスしつつ、まずは具体的なイ

メージとして、自分が教育実習で出会った生徒たちとそのクラスを想定してみるとよい、ということアドバイスする。

2回目グループを組み、3～6回目まで、前述のように教科指導や生活指導に関するテーマなどを設定してグループで話し合う時間を設けつつ、他方で、課題づくりと発表に向けた準備を進めていく。話し合っグループ名をつけることと、ひとまずグループの中で、課題作成のために共通のテーマや条件をゆるやかに設定することを指示する。「夢と希望」など進路をグループ共通のテーマとしたり、高校の卒業式の日、中学校2年生の2学期初日に配付するなどという条件を共通にするグループもある。

「教職実践演習」の他の先生のクラスでは、いくつかの課題の1つとして学級通信を作成・発表することを取り入れ、1～2週間で作成して発表を実施されている場合が多いことと思う。他方、筆者の担当クラスでは、早い時期に課題を示して、数回かけて徐々に作成し、最後の2回を使って発表するという方法をとっている。「おわりに」で述べるように、クラス全体での模擬授業の時間設定が難しいという課題は残るが、「未来を創る中学生／高校生に伝えたいこと」を学級新聞や教科新聞にして発表することを1本の軸に据えることで、履修学生各自の参加や課題への取り組みの意欲を維持し高めることができているようにも思う。課題づくりに取り組みつつ、同時並行で、広く教科指導や生徒指導についての実践的な考察をディスカッションを通して深めることで、教育実習を終えて、改めて「中学生／高校生に伝えたいこと」は何かを各自が意識しやすくなると思われる。

途中、作成の際のヒントとして、自分の伝えたいメッセージを、文学・映像・マンガ・音楽などの作品に出てきた印象的な言葉を手がかりとして(そうした言葉に仮託して)伝えていくとよいということには言及してきたが、2013年度、2014年度のクラスでは、様々な興味深い学級通信、教科新聞が出来上がった。

自身のボランティア経験を題材としたもの、やなせたかし氏の詩をとりあげて粘り強く取り組むことの意義を述べたもの、クレヨンしんちゃんの言葉から思いやることをテーマにしたもの、世界の子どもたちが抱える問題をとりあげたNGOのレポートを紹介して自分の“あたりまえ”を疑うことの大切さを伝えるもの、生活習慣として朝食をとることの大切さを科学的な説明を通して伝えるもの、高校3年の最後の教科の授業で配付する「何のために勉強するのか、勉強をし続ける必要があるのか」をE・H・カーの言葉を手がかりとして考えさせるもの、オリジナルで描いたイラストのミニ作品を通して「全力で取り組む」ことの大切さを述べたものなど、筆者が事前に想定した以上の様々な学級通信・教科新聞が登場した。発表会の前の回(6回目)までには、課題の作成を各自進めていくが、毎回、グループ内でアイデアを説明し、下書き段階のものを見せ合って意見交換することで、次の回までにブラッシュアップするといった作業を繰り返していく。絵やイラストの上手な学生も多く、レイアウトに工夫を凝らしたものがいくつも出来たが、他方、あまり絵は得意ではないと言っていた学生が、見た目にも読みたい!と思わせる学級通信を作るのだといって、グループメンバーに助けられなが

ら、一所懸命手描きのイラストを練習して描き加えるといった場面も見られた。また、中学校の卒業式の日々のホームルームという設定で、「人と人との繋がり」というテーマを、FUNKY MONKEY BABYSの「希望の唄」という曲にのせて創作ダンスで伝える、という取り組みをした学生もいた。

各回、また最終回(8回目)のコメントシートでも、自分自身の取り組みを通して、伝えること、伝えようとするを形にする大変さと面白さを改めて実感したという感想が共通して見られ、さらに、他の参加者の発表を見て、聴くことによって、自分の考えつかなかった様々なアイデアに触れ、刺激を受けたという言及も多数見られた。

#### おわりに—今後の課題—

以上のように、筆者の担当クラスでは、2013年度、2014年度ともに「未来を創る中学生／高校生に伝えたいこと」の課題づくりを時間をかけて行い、その過程で教科指導、生活指導などに関する省察を深めるというクラス運営を行ってきた。

個別にクラスの時間外に数名で自主的に模擬授業をし、それを筆者が見ることはあっても、時間中にクラス全体の中で、数名を代表として模擬授業を行うことはまだ出来ていない。本学の「教職実践演習」のクラスであれば、同じ免許教科ばかりでなく、他の教科の人たちからも意見を得られる貴重な機会になることは間違いなく、プログラムの中に組み込むことができるように検討していきたい。

また、池袋キャンパス展開クラスに対して、

新座キャンパス展開クラスでは、クラス編成において取得予定免許教科のバリエーションは限られていて、同じ学科で同じ教科の履修学生が1クラスの約半分になる。筆者は今年度（2015年度）に初めて新座キャンパス展開の1クラスを担当するが、池袋でのグループ分けや活動と

は異なるやり方を導入することも場合によっては必要になるであろう。進め方について、その年度ごとに、クラスの条件などにもあわせて臨機応変に工夫していくことが必要になってくると思われる。